

デング熱に注意～ヒトスジシマカに刺されないように～

昨年の夏、代々木公園の周辺で蚊に刺された人が、デング熱を発症しました。その数は約 160 名で、千葉県においても千葉市稲毛区で 1 名の発症がありました。デング熱はデングウイルスの感染症で、熱帯・亜熱帯地方を中心に年間約 3 億 9000 万人が感染し、9600 万人が発症します。海外の流行地で感染し、日本に帰国あるいは入国してから発症した人は毎年 200 名近くいますが、デングウイルスに感染しても症状がでない人はその 4 倍くらいと推定されます。デング熱は人から人に直接感染することではなく、日本ではヒトスジシマカが媒介します。海外で感染した人を刺して体内でデングウイルスが増殖したヒトスジシマカが、他の人を吸血した時に感染させます。昨年の代々木公園の流行はこうして起こり、69 年ぶりの国内での流行ということで注目されました。今年の夏も、昨年と同様にデングウイルス感染症が流行する危険があります。

ヒトスジシマカはヤブカの仲間で、体長 4.5mm 程度、背中に 1 本の白線があり、脚に白い斑があります。冬季は卵で休眠・越冬します。幼虫は住居周辺の小さな水溜りで孵化し、5 月中旬頃より成虫の活動が始まります。成虫の発生は通常 8 月上旬にピークを迎え、8 月が最も成虫が多い時期になります。その後は減少期に入り、10 月下旬頃に活動がなくなります。蚊は産卵に向けた栄養補給のために吸血行動をします。デング熱に感染した人から吸血し、蚊の体内にデングウイルスが入ると約 7 日で感染蚊となり、他の人を吸血することにより感染が拡大します。成虫の寿命は 30～40 日です。

【成虫対策】

蚊に刺されないようにすることが唯一の予防法です。日中に屋外で行動する際には、長袖シャツ、長ズボンを着用して肌を露出しないようにします。蚊は色の濃いものに近づく傾向がありますので、白などの色の薄い着衣が良い様です。蚊忌避剤（スプレー、塗布）や蚊取り線香は効果的です。殺虫剤は通常使用されているもので効果があります。戸外の環境整備としては、下草刈りや幼虫発生源の除去、清掃が必要です。

【幼虫対策】

ヒトスジシマカの飛行範囲は 50～100m ほどで、遠方から飛来することはなさそうなので、住居周辺の発生源を無くすことが重要です。雨水マスに幼虫が発生しないようにするには、昆虫成長制御剤（IGR）の懸濁剤、粒剤、発泡錠剤などを投入する方法があります。IGR は遅効性ですが、効果の持続性が期待できます。卵は乾燥に強く数か月経っても、水に浸ると孵化します。ヒトスジシマカの幼虫は比較的小さい容器に発生しますので、住居では植木鉢やプランターの受け皿に注意します。住居周辺では雨水が溜まっている容器、廃棄されたプラスチック容器、雨除けに被せたビニールシート、廃棄された機械のフレームなどを整理し、古タイヤにはコップ半分ほどの塩を入れ発生源対策をします。

【デング熱の症状】

WHO の報告では年間 5000 万人の発症があり、その内 50 万人が重症のデング出血となって 2.4 万人が死亡すると見積もっています。ウイルス保有蚊に吸血されると、2～14 日の潜伏期の後、38℃以上の高熱が出て、頭痛、全身の筋肉痛、関節痛、嘔吐などのインフルエンザに似た症状が出現し、小さな赤い発疹がでることもあります。軽症の場合でも歯茎から出血したり、皮膚に点状出血がみられることがありますが、通常は発症後 1 週間ほどで回復し、予後は比較的良好です。しかし、一部の患者では重度の出血傾向と血管から血漿漏出が起こり、循環不全・ショック状態となり重症化して死に至ることもあります。デングウイルスには 4 つの血清型があります。デングウイルスに感染すると、感染したウイルスの血清型に対しては終生免疫を獲得しますが、他の血清型に対する交叉免疫は数か月で消失するため他の血清型のウイルスには感染するので、デング熱にまた罹ってしまいます。そして、重症例は 2 回目以降の感染時に起こるとされています。

デング熱に効く薬はまだ実用化されていません。解熱剤はアセトアミノフェン以外の使用は出血を助長するので使用してはいけません。ワクチンは開発が進められておりますが、実際に使用されるまでにはまだ時間がかかりそうです。デング熱が疑われる場合には、血液検査で確定診断ができますので、医療機関を受診して相談して下さい。